



はなみずき

mail:wjls@wjls.org http://www.wjls.org/

『非認知能力』を育てる

校長 三原 洋一

「分かり切った答えを教える授業では、(生徒は)二流のロボットにしかねない。」

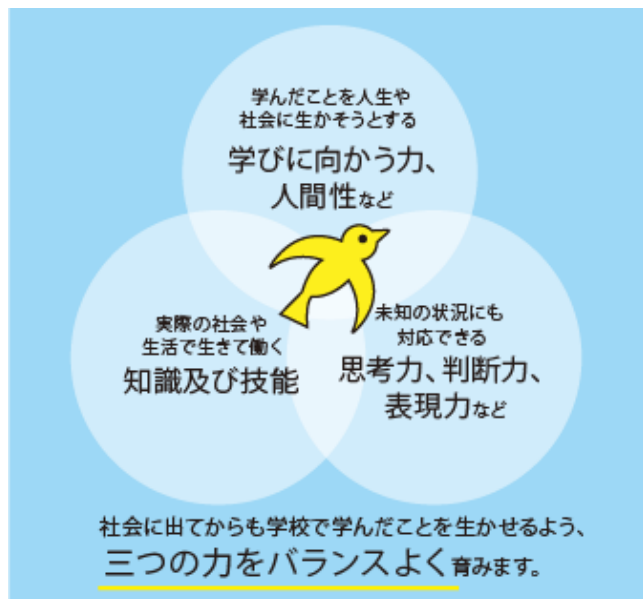
経済協力開発機構 (OECD) のアンドレアス・シュライヒャー教育・スキル局長の記者会見でのこの言葉で始まる記事が、今年の2月18日付の読売新聞の1面分をいっぱいに使って掲載されていました。記事のタイトルは「AI時代こそ『非認知』学力」でした。

生成AI(人工知能)が急速に人間の活動領域に進出するなど、社会が大きく変化する中、学力観も転換期を迎えている。人間は今後、AIが代替できない分野で力を発揮し、正解のない問題に力を合わせて対処することが求められている。

そこで注目されているのが、創造性や協調性など人間ならではの能力だ。これらは、「非認知能力」と呼ばれ、文部科学省も学力の要素として重視している。

2/18/2024 読売新聞

2020年度から実施されている学習指導要領では、学力は、3つの要素に整理され、従来の「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」に加え、「学びに向かう力・人間性」としています。



文部科学省 HP から

ここで示されている「学びに向かう力・人間性」が、非認知能力にあたる力です。

目に見える学力だけでなく、この「非認知能力」を育てることが、これからの教育では必要になってきます。

「非認知能力」と一言に言ってもいろいろな要素があります。その中でも特に、次の3つを大切にしていきたいと考えています。

- 目標を達成するための忍耐力や自己抑制 …… 目標に向かって頑張る力
- 他者と協力するための社会性や折衝能力 …… 人とうまくかかわる力
- 情動を抑制するための自尊心や自己肯定感 …… 感情のコントロール力



幼児期から、「自分で考えて動く」「あきらめずに達成する」「友達と協力して何かをする」といった経験を積むことが非認知能力を高める上でとても重要です。



将来、社会人として組織の中で働く上で、必要不可欠なものであると思います。この力は、我々大人が、子どもとていねいに関わり、子どもの意見を聞きながら、自分の意志で生活や学習の習慣を決めていくことで育っていきます。学校の教育活動の中ではもちろん、家庭においても、この力の重要性を意識しながら子どもたちを育てていきたいものです。

本校でも、非認知能力が学力に位置付けられていることを踏まえて、子ども自身が課題を見つけ、解決していく力も育むべき重要な資質であることを教職員が意識しながら、「共働学習」を進めていきたいと考えています。

エピペン講習会 4/13

心肺蘇生法講習会 4/27

今年も、大石健一様を講師に迎え、アナフィラキシー症状について詳しく学びました。「アナフィラキシーとは血管の気孔のようなものが開いている状態で、エピペンを打つ事によりそれを閉じる」というイメージを職員にもわかりやすく説明していただき、エピペンの模型を使ってその使用方法についても学びました。

また、ウィートンの救急隊員の成田桜子様他1名を講師とした CPR（心肺蘇生法）講習会も実施しました。心肺蘇生法について、ビデオを見て学ぶとともに、胸骨圧迫（心臓マッサージ）、AED の操作方法および窒息の対処方法の基礎を学び、その後、マネキンを用いて訓練を行いました。

いずれも、子どもたちの命に関わる大切な研修です。緊急の事態に適切に対応できるように訓練を重ねておきたいと思います。

